

わたしは「大事なことは、目に見えるものや、地上に出ているものだけではないんだ」ということに気がつきました。

地中には、表に出ている作物の、少なくとも2倍以上の長さの根が張っています。土のなかには2倍以上の世界があるのです。

目に見える地上部だけを見て右往左往し、必死になってりんご作りをしているとき、わたしにはそれがわかりませんでした。

しかし、土の大切さに気づいて気を配るようになってから、りんごの栽培はぐんぐんと前に進み始めました。

目に見えていることだけ見ている、本当のこと、真実はわからないのです。

それは無農薬・無肥料の自然栽培に限ったことではありません。人間もそうです。

大事なことは、目に見えない部分にあります。

あなたの表に出ていない、自分自身の土壌と根はどうなっているのでしょうか？

活かして生きる

地球環境のなかで、あるいは神様や仏様のもとで、人々はよく「生かされている」という考え方をします。

奢る<sup>せど</sup>気持ちがない謙虚な捉え方で美德ではありませんが、自然に直面したとき、「生かされている」という受身だけではなく、人は本当は生きていけないことを知らなければなりません。

たとえば、わたしはりんごの自然栽培に成功したあと、りんごの下草を刈って、りんごの木に秋を教えるようにしました。

なぜ秋を教える必要があるかというと、草ボーボーのままですと土の温度は一定です。だいたい24度から28度のあいだを保っています。太陽が照りつける酷暑日でも、雑草が日陰を作って土の温度が上がらないようにしてくれます。外気が30度でも土の温度は24〜28度を保持しているのです。

しかし、そのままにしておくと、秋になって外気の温度が下がっているのに、逆に今度は雑草がある程度の時期まぐ保温効果を発揮して、りんごの木は秋が来たことを知らないままになります。

わたしはりんごの木に温度差を感じてもらうために草を刈りました。外気が直接当たって土の温度が下がるため、根っこのセンサーが働き、「秋が来たんだなあ」とわかると思ったのです。

実際色づきの悪かったりんごが、赤く色づくようになりました。朝晩と日中の気温の差が大きい津軽の秋を味わい、「赤

くならなきや」という意思が働いたわけです。

自然は、手を加えないで放っておくのが一番ではありませ  
ん。

『自然農法』というと、ドイツのデメター協会のバイオダ  
イナミック農法のように、「宇宙のリズムに合わせ、天体の運  
行に即して種を蒔く時期や収穫時期を決める」というものや、  
人工的なものは一切加えず、荒れ放題にしておけばよいとい  
う精神的なものが知られています。

わたしが影響を受けた福岡さんの自然農法も、なにもせず  
に放っておく方法でしたが、わたしはそれとは違うやり方を  
自分の経験からつかんでいきました。

気づいたのは、自然とともに生きるということは、ただギ  
ヤートルズのように自然と同化して走り回ることではなく、  
「自然を活かして生きる」という考え方がとても重要だとい  
うことでした。

自然は、人の力でコントロールできるような相手ではあり  
ません。

自然のバランスや営みを知ったうえで、その仕組みに逆ら  
うことなく、自分たちがうまく生きていけるように活かして  
いくわけです。宇宙のエネルギーを集めるのではなく、すで  
に土のなかに存在しているエネルギー、土が持つパワーをい  
かに活かすか、人にはそれが許されているだけです。土に働  
いてもらうのです。

人間は良くも悪くも地球上のほかの生き物より知恵があり、  
『万物の長』といえる存在ではありません。

しかし、自然をうまく利用しているように見えて、実は自

然を破壊する行為ばかりしています。わたしもむかしは、「自  
分が、畑や自然を、この手で支配してるんだ」という感覚が  
ありました。効率化を図るために、自然を傷つけるような栽  
培をしていました。

いまは違います。

「人間も植物も、地球上の生き物のひとつに過ぎないんだ  
」  
と  
思  
っ  
て  
い  
ま  
す。そして、万物の長として「活かして生きる」  
という考えを持つことが、とても大事だと感じているのです。

木に話す

いまでも畑に行くとき必ず木に一本一本話しかけます。

「よく頑張ってるなあ、ありがとう」

「ちょっと病気にますね。いまから外科手術をしてあげま  
すから」

自宅からいちばん遠い畑は車で40分のところであり、近い  
ところは15分くらい、あとのふたつは20分くらいのところ  
にあります。作業によってはひとつの畑にかかりつきりになる  
こともあります。そういうときは残りの畑へ行き、「いまこう  
いう作業をしているから、ちょっとしかいられないけど、頑  
張ってちょうだいよ」

と挨拶だけして、また作業している畑に戻ります。

講演や農業指導で長い出張が入り、数日間どうしても畑に  
行けないときは出かける前に事情を説明して、

「しばらく来れないけど、頑張ってるね」

と伝えます。

出張先から女房に電話をして、木の様子を教えてもらうことも度々です。わたしが電話で、

「元気にしてるか？」

と聞いたら女房のことではなく、女房が畑に行って見てきたりんごの木のこと。実をいうと女房や子供に対しては、わざわざ電話をしてそういう言葉を使ったことはありません。

その辺は女房も心得ていて、

「りんごの木のことだけど」

と前置きしなくても、

「心配しなくても大丈夫だよ」

と返事してくれます。

長年連れ添って苦労を共にした夫婦。わかってくれているでしょう。

だから、安心して出かけていられるわけです。逆にいうと、そうしないと出かけることもできません。

りんごの木も、わたしにとっては家族のようなものです。そしてわたしたちは、ともに大変な時期を乗り越えて、頑張っ

て生きてきた仲間なのです。よその人から見たら、「りんごに話しかけたって、言葉がわかるわけでもないのに」と思うかもしれませんが。

でも、りんごの本はきつと理解してくれていると思っ

ています。人間の言葉というのは、肥料にも農薬にもなるのです。かつてわたしが話しかけなかった木が、一本も残らず枯れてしまったことは紛れもない事実なのですから。

これはりんごの木に限ったことではないと思います。すべてのものに言葉の力は有効だと思

えず、車や機械だってそういう一面を持っていると思います。

わたしが使っている中国製の重いパソコンは、4年間まったくトラブルがありません。つねに持ち歩いて酷使しているのですが、「いつもありがとう、お前が必要だから壊れないでくれよ」

と話しかけているからでしょう。

よい言葉をかければ、よい木霊こだまが返ってくるのです。

最近はお小くして性能のいいパソコンが4〜5万円で購入できるようになりました。次はそちらを買おうかなという思いが頭をよぎるのですが、2台は必要ありませんので、いま使っているのが動いてくれるあいだは、「ありがとう、頑張っ

な」といいつづけるつもりです。

## 癌と仲良く

同い年の知り合いが癌になりました。気がついたときには末期で、国立がんセンターに行っただけですが、「もう手の施しようがない」といわれてしまいました。

最初は直腸癌だったのが肺に移り、それも進行している……。そのときでも煙草が好きで吸いつづけていたような人です。からだはポロポロで、「余命1年」といわれました。

わたしがそのことを知らされたとき、九州にいる実のお兄さんは葬式の準備に動いていました。本人も「もう1年も、もたないくらいにダメだ……」と諦めていました。

「ダメだと思ったら負けなんだ」と諭しました。

そして、言葉療法を提案したのです。

治療をして排除しようとするから、癌はしゃかりきになって進行するのかもしれない。自分の癌に向かって、「俺のからだに完全にダメになったら、お前たち癌細胞も生きていけないんだよ」とよくいい聞かせてみればいいのではないかと思っただけです。へたな化学療法を行うより、手術ができないほど進行してしまつたなら、「共生してさあ、末永く共に生きていこうよ」と仲良くなつたほうがいいに違いないと思つたのです。

彼は癌に毎日のように話しかけ、すごく元気になりました。余命1年と宣告された直後は死人のように生気がなかつたのですが、見た目にも元氣を取り戻し、3年経つたいまもまだピンピンしています。

わたしは無農薬栽培を通じて、「活かして生きていく」ということを自然から教えてもらいました。人間は人間同士だけで生きているのではなく、虫や微生物や土と共生しているのです。

もちろん、病気に関していえば、早期に発見した病巣は化学療法で治すことも大事でしょう。しかし、もう手の施しようがないくらいに広がつてしまつたのなら、「共に生きよう」と語りかけることも有効だと思つたのです。

そういう実感があつて、言葉の力を信じています。

いまは人も言葉も殺伐としすぎている世の中です。経済の発展＝心の崩壊といいますが、言葉の崩壊でもあると思ひます。

だからこそ、すべての人や物に愛のある言葉をかけるといふことは、とても大切なことだと思つたのです。

個人主義が強すぎるいまの人間社会は、それを忘れているのではないでしょうか。

## 金属にも魂

たまたま車の修理に行つて、出会つた整備工の話です。

車の修理というのは床屋さんや美容院と一緒に、一度その工場に行くと、次からも同じところへ行くものではないでしょうか。自分のうちから通いやすいところであつたり、なにかが気に入つたりして一度行くと、妙にご縁ができます。

そんな調子で入つた修理工場でしたが、何度となく通うようになり、その整備工と毎度顔を合わせるようになりました。

だいぶご年配の様子でした。年寄つてきたことも関係あるのでしょうか、仕事に慣れすぎて緊張感がなくなつてしまつたのかもしれません。とにかく仕事は乱雑なのです。一応修理して動くようにはできるのですが、彼が直すとは必ずといっていいほど、また壊れてしまします。わざとやつてゐるわけではありませんし、人柄は決して悪くありません。仕事仲間には慕われているくらいでしたが、あまりにも信じられないようなミスをするので、ちよつと問題になっていました。

具体的には、4つあるタイヤのボルトを全部締めたりがひとつ忘れていたり、エンジンを組み立てたなかにスパナを忘れたり……危なくて仕方がありません。「とても彼には大事な仕事はさせられない」。暗黙の了解のようになってしまつた。

見兼ねたわたしは、なにかアドバイスできることはないか

と仕事ぶりをチェックしていると、気づいたことがあります。た。

だいたいそういうミスを犯す人というのは、仕事のパートナーである道具に愛着がないものですが、やはりそうでした。とても乱暴に扱っていて、だから整備しおわった車につけたままにしまおうのです。

彼が使っている工具は、勤めている会社を買ってくれています。プロが使う工具は、見た目は同じようでも、100円シヨップや街の小売店で売っているものとは全然違います。スパナひとつとっても、材質が全然違い、値段もまったく違います。そんな高い道具なのに、「べつになくしたところでまた工場が買ってくれるから問題ない」と思っているのです。思っている自覚はないかもしれませんが、無自覚でそう思っているのです。

わたしはいいました。

「あんたの道具にはみんな魂があるんだよ。心あるんだよ」彼はそのときスパナを手にしていましたが、「そのスパナにだって心があるんだ。口いわない工具だと思って使ってるから、あんたの仕事には魂がこもらないんだ」

実際、彼がスパナで締めても、なぜか緩むことが多いのです。どんな力で締めあげても、なぜか緩むことが多いのです。これは力の問題や技術の問題ではないと思います。そこでこう提案してみました。

「スパナじゃなくて、自分の手で締めている気持ちになっ  
てやったらいいんじゃないの？」

実際はスパナで締めていても、それを単なる道具とは思わ

ず、自分の手を使って締めている感覚を持つてもらえば、きっと魂がこもると考えたのです。

最初はポカンと聞いていましたが、いつていることの本質がだんだんとわかってきたようで、「うんうん」と素直に聞いてくれました。

仕事がいい加減なばかりに、もし走行中にタイヤが脱輪したら大事故につながります。

「あんたのやった修理を信頼してみんな走っているんだよ。命を預かっているとって、やつてくれなくちゃ」

整備工の仕事の本質は、車の修理といった断片ではありません。

そういう意識の高さと、責任感を持つてほしかったのです。気持ち伝わったのか、仕事ぶりが見違えるように変わりました。

変化はまず工具の置き忘れがなくなったことに現れました。道具をとんでも大切に、丁寧に扱うようになったのです。

やった仕事を必ず点検するようにもなりました。「見直し」というのは、忙しさや慣れで飛ばしてしまうことが多いのですが、彼は必ず見直して、自分の欠点を補うようになったのです。

聞けば、もともとは腕のいい整備士だったそうです。しかし、人間はどこかひとつ心に穴があくと、道を外れてしまうことがあるものです。一度外れると、どんどん悪化してしまいます。そういう状態だったのでしょうが、道具を大切にすることを取り戻してからは、すっかり腕のいい整備士に戻りました。

人間がすごいのは、「思い」や「気持ち」の持ちようです。いくらでも物事を変化させられることです。心の眼が開くのです。その力は、だれにでも、いつでも発揮できます。

わたしは作物の気持ちを理解しようと思いました。

赤ちゃんの泣き声、ただそれだけですべてを理解する母親のような気持ちで接すれば、きっと素晴らしい作物になってくれるはず。もしも自分がりんごだったら、野菜だったら、稲だったらどうしてももらいたいか、それを考えるのが百姓として当たり前なことだと思いました。

自分が実践していることを彼に話したわけですが、これはすべてに通じる話だと思えます。

東邦出版株式会社 木村秋則